

メトロポリタン史学会 第十一回総会・大会のお知らせ

下記の要領でメトロポリタン史学会の第11回総会・大会を開催します。大会では「戦後の歴史と歴史学」をテーマにシンポジウムを行います。会員の皆さんの参加をお待ちしております。

- 日時 2015年4月18日(土) 午前10時30分～午後6時
会場 首都大学東京 本部棟1階・大会議室
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)
日程 ①総会：午前10時30分～12時
②大会：午後1時～6時

シンポジウム「戦後の歴史と歴史学」

趣旨説明 (白川耕一氏)

研究報告

[報告者]

戸邊秀明氏 (東京経済大学)

「戦後思想としての「戦後」史叙述——1950年代史を焦点として——」

鄭榮桓氏 (明治学院大学)

「朝鮮現代史」は可能か——解放前後史像の再検討——」

白川耕一氏 (國學院大学兼任講師)

「歴史家の世代とドイツ連邦共和国の歴史像

——第二次世界大戦後から現在まで——」

全体討論：午後4時～6時

司会 中野隆生氏・奥村哲氏

コメント 下田淳氏・佐々木紳氏・三品英憲氏

懇親会：午後6時30分～8時30分

2014年12月7日(日)、第7回歴史探訪「国立ハンセン病資料館見学会」を開催しました。
年の瀬の寒さの中にもかかわらず、それをはねのける意義深いひとときとなりました。

第7回歴史探訪参加記 国立ハンセン病資料館

木畑和子 (1972年修士課程修了)

これまでほとんどの「歴史探訪」に参加してきましたが、今回の「歴史探訪」は私にとって特に意義深い

ものでした。日本のハンセン病患者強制隔離政策について、いつか勉強してみたいという気持ちがずっとありながら、ついそのままにしていたからで、資料館見学と黒尾和久氏（同資料館学芸部長）の解説は、この問題を考えるよい機会となりました。

私が子供時代に培ったハンセン病（この場合らい病と言った方がよいかもしれませんが）に関する「知識」は、伝染性のとても怖い病気であるという当時の偏見そのものでした。それが誤りであるということを知ったのは非常に遅く、藤野豊『日本ファシズムと医療』（岩波書店、1993年）を読んで、伝染性が極めて低いにもかかわらず日本の近代化とナショナリズムとの関わりで強制隔離政策が行われていたことを学んだのです。それは「らい予防法」が廃止される数年前のことであり、それまで知らなかったということは、平均的日本人だったといえるかもしれません。ただ、知らなかったことの衝撃が非常に強かったのは、私の学生時代の愛読書が当時評判になっていた神谷美恵子『生きがいを求めて』（みすず書房、1966年）だったからです。彼女についてご存知の方も多かもしれませんが、精神科医として長島愛生園のハンセン病患者につくした女性です。その本はハンセン病患者の心の問題を扱ったもので、何度か読みました。しかし、出版当時にはすでにハンセン病は特効薬により完治する病気となっており、日本の隔離政策には医学的根拠のないものになっていたことを、この本から読み取ることは出来ませんでした。そのことに気がつかなかったどころか、小船で長島愛生園に通い、感染するかもしれない患者の心に寄り添おうとした人として、彼女を聖女のごとく思っていました。

また患者の書いたエッセイも読んでいましたが、その中には今も浮かんでくるような心に残った文章もいくつかあります。そうした患者自身の文章を読んでも何も気がつかなかったのは、私が読んだ患者の文章がきわめて限られたものだったためであることと、また当時の私の読みとり方が偏見のせいで浅かったのかもしれない。今思い返してみると、すでに感染については、あまりいわれなくなったにもかかわらず、私の中に「感染」という言葉が染みこんでいたためでしょう。

日本の強制隔離政策をかたくなに維持しようとした光田健輔氏の影響を強く受けた神谷氏は患者がおかれている状況を問わぬまま、そのような人々がおかれた精神状態のみを救済しようとしたのです。彼女の「愛」は疑いないものですが、その古い「救らい思想」によって、結果として患者の絶対隔離政策を補強する役割を果たしてきたともいえるのです。この日本の「医学犯罪」とも呼べる強制隔離政策の問題に気がつかなかったことは、私にとって重たいものとなりました。ちなみに私の90年代の研究テーマは「ナチズムの医学犯罪」でした。

今回の訪問では展示見学に先立って、ホールで黒尾氏による解説とガイダンス・ビデオ上映がおこなわれました。黒尾氏の解説は、収容者のおかれた人権を無視した非人間的な環境、患者が患者を介護するというような厳しい生活状況での症状の悪化、治癒しても社会復帰ができず終生絶対隔離であったことなど強制隔離の過酷な実態をはじめ、ハンセン病と「砂の器」、「千と千尋の神隠し」の関わりなどポイントを押さえたもので、ハンセン病をめぐる日本の医学界の問題、日本社会の問題を考えるにあたってきわめて有益なものでした。

展示はそれぞれ非常に興味深いものでしたが、とりわけ強い印象を受けたのは、逃亡を防ぐための園内通用券、劣悪な患者用住居の復元展示、療養所の実態を示す患者たちの園内作業の様子や重監房跡、そして学校と子供たちの写真でした。子供たちがこんなに大勢収容されていたのか、ということにもショックを受けましたが、患者夫婦が狭い部屋に3、4組が雑居させられていたなど、私が60年代に読んだ本などからは全く想像を超えた世界でした。

1950年代に国際らい会議などで強制隔離に対する国際的批判が強まり、60年代には沖縄では開放医

療が行われるようになっていたにもかかわらず、その時期に私は神谷美恵子氏のハンセン病患者に対して発した「私たちではなく、なぜあなたが」という言葉を繰り返し読んで感銘を受けていたわけで、見学を終えてからずっと自分自身に対して当惑した気持ちを持ち続けています。

見学会終了後の懇親会に、黒尾さんも参加くださり、いろいろな質問もできましたし、とても有意義な見学会となりました。今回は見学会告知期間がやや短かったためか、参加者が少なく残念でしたが、お忙しい中おつきあいくださった黒尾さん、また企画して下さった木村誠さんをはじめとするメトロポリタン史学会の世話役の方々には、心より感謝申し上げます。



【本会報第16号記事の訂正】

2014年10月24日発行の『メトロポリタン史学会会報』第16号の【提言】欄に寄稿して下さった椋川一朗氏の文章に、事務局担当者の編集ミスにより脱文がありましたので、以下のとおり訂正いたします。

【誤】

ルターの宗教改革（一五一七年～）は、中世の西欧で唯一・最大の宗教キリスト教の分裂を招いただけでなく、広く思想界に混迷をもたらした。——その懐疑論を正面から受け止めて、これを克服したのが同じくフランスのデカルトである（だがデカルト哲学は今の日本人には苦手ならしく、適切な解説書が見当たらないが、とりあえず拙著2〔一一七頁以下〕を一読されたい）。

【正】

ルターの宗教改革（一五一七年～）は、中世の西欧で唯一・最大の宗教キリスト教の分裂を招いただけでなく、広く思想界に混迷をもたらした。しかも、その混迷をさらに深めたのはフランスのモンテーニュが提示した「懐疑論」であった。——その懐疑論を正面から受け止めて、これを克服したのが同じくフランスのデカルトである（だがデカルト哲学は今の日本人には苦手ならしく、適切な解説書が見当たらないが、とりあえず拙著2〔一一七頁以下〕を一読されたい）。

椋川氏には改めてお詫び申し上げます。なお、本会ホームページにアップロードされている『会報』16号のPDFファイルは、記事を訂正済みですので、ご参照いただければ幸いです。

【投稿のお願い】

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回12月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年8月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。

- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
- ①論文（図表を含み、24,000字以内；英文の場合は、8,000語以内）
 - ②研究ノート・史料紹介（同 12,000字以内；英文の場合は4,000語以内）
 - ③学界動向（8,000字以内；英文の場合は2,700語以内）
 - ④時評・提言（4,000字以内）
 - ⑤書評（4,000～8,000字）
- (5) 論文、研究ノート（縦書き、横書きいずれも可）には、欧文で要旨（300語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨800字以内）。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿（表、図表を含む）3部、USBメモリなどの記憶媒体及び別記送付状*（1部）を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り50部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系
国際文化コース（歴史・考古学分野）、河原 研究室気付
『メトロポリタン史学』編集委員会
Tel: 0426-77-2119（河原研究室） Fax: 0426-77-2112
E-mail: kawara28@tmu.ac.jp（河原温研究室内） SNC47077@nifty.com（河原温）

* 送付状は学会ホームページ（<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>）からダウンロードしたものをコピーするか、事務局にお問い合わせください。

【事務局からのお願い】

●メトロポリタン史学会会報第17号をお届けします。第11回総会・大会のご案内を申し上げます。奮ってご参加ください。引き続き会財政健全化のため、年会費を年度内にお支払い下さいますようお願いいたします。一般5,000円、学生・院生3,000円です。

メトロポリタン史学会（会長 佐々木隆爾）

〒192-0397

東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

TEL: 0426-77-2110（木村誠研究室） E-mail: mshigaku@tmu.ac.jp

ホームページ: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替: 00100-0-537287 メトロポリタン史学会